

だけに、子どもの心はいつの間にか、人間不信に傾いてしまうのです。これも友達を作れなくする重要な原因になつていきます。

親をこういう状況に走らせるのは、社会一般の価値観によるものですが、その価値観がどういうものか、考えてみたいと思います。いま一般的に、いい成績、いい大学、いい会社という一つの形が、びちつと決まつているように考えられています。これはあくまで企業の要請によるものです。労働力として質がいいか、企業にとつてプラスになる人間かどうかという点だけで、人間の良否をはかるようになってしまつたのです。

わが子を陽の当る所に置きたいという願ひから、少しでも、これに近づきたいと望む親の気持ちもわからぬわけではありません。しかし、その気持ちがまた、子どもを否定的に見てゆく傾向につながつてゆくのです。

#### 半母親失業時代

昔は子どもがたくさんおりましたから、それぞれの子に良いところを見つけ、全体として、よしとしていたのですが、現在では、ひとりかふたりの子にすべてをかけています。ですから、そこには親の願ひを具現化してくる子でなくては困るといふ親のエゴが働いてきます。それを神聖な母性愛と信じて、何の反省もなく、子ども

に押しつけるところに、いろいろな問題が起こつてくるわけです。

また、子どもの数が少ないと、どんなに気をつけていても、つい過保護に陥りがちですから、結果としては、子どもの自主性を奪うことになります。

なぜ私たちは、それほどまでに、子どもにかかずらわるのでしょうか。それは、子どもの数が圧倒的に少なくなつたのと、家事労働が機械化によつて非常に楽になつたことによります。よく、三十才半ばにして、半母親失業時代にはいるなどといわれますが、事実、この年令の女性には、孤独と倦怠からくるノイローゼが非常にふえているということなのです。

それで、昔のように、多くの子を生めばよいかといえますと、人口問題は、いまや地球的規模で考えなければならぬ深刻な問題になつていきます。資源国でない日本がたくさん生んで資源を消費することは、他の国々が許さなくなつてしまいますし、どの国でも少産主義に傾いています。また、失業時代を少しでも先に延ばそうと、子どもをいつまでも自分に引きつけておこうとする子育てが定着してきています。自立すべきなのは、子どもよりもむしろ、母親の方であると言えるでしょう。事実、  
「趣味を持って」  
「仕事を捨てて」といったような、ツ